

■ 一時帰国から戻りますと、予想通りカンボジア風ハプニングが待っていました。いつものように大家さんのお婆ちゃんから孫までが賑やかに迎え入れてくれたのですが、ひと落ち着きしたところでお婆ちゃんがおもむろに「インターネットは使えなくなっているよ」と言うのです——「あなたたちが留守の間に塀の周りをすっきりさせておいてあげようと思い、職人を呼んで木の枝を切らせたら、インターネットのケーブルまで切ってしまった」。……………「そんなことが起こり得るのか」という驚きと共に、「なんで直しておいてくれなかったの？」という疑問が湧いたのですが、そこはひとまず抑えて、急いでインターネット接続会社に連絡し修理をすることにしました。



問題の木と電線

わが家のインターネットは接続会社からアンテナ、ケーブル、モデムをレンタル（月払い）する方式になっています。会社が迅速に対応してくれたお蔭で修理は比較的短期間で終了したのですが、私の頭に浮かんだのは修理代を払う責任は誰にあるのか、ということでした。勿論現実には私たちが払うことになることは分かっていますが、理論上はどうか……ミスをした職人？ 職人に発注した大家さん？ 利用者の私たち？ とところが、一向に会社からの請求が来ず、とうとうこのケースでは修理代は払わなくて良いということが分かり、二重に驚きました。修理は3人で丸1日掛かり、パソコンの再設定までしてくれたにも拘わらず、です。請求されない理由は「レンタルだから」ということとしか考えられないのですが、たとえレンタルでも利用者側のミスで損害を与えれば、利用者が責任を負うのが常識だと考えて

いた私たちにとって、狐につままれた感じでした。「貧しいからといってがめついばかりではない」という思いも湧いて、ホッとした気持ちにもさせられました。

この話には付録があります。数日後、門に付けたブザーが鳴らないことに気付き、お婆ちゃんに尋ねたところ、その電線も職人が一緒に切った、ということでした。この時はもう私たちは慌てず騒がず、大家さんの息子さんに頼んで修理してもらいました。

■ 一か月振りに会うオー村の子どもたちの様子はどうか、少し気になっていましたが、相変わらずの、はち切れそうな笑顔で迎えてくれました。多くの子どもたちがいつもより二倍も強くハグをしてくれましたので、私たちが戻ったことを喜んでくれたのでしょう。6月の「奨学金生徒の集り」の日の前後に丁度プノンペンでユネスコ世界遺産委員会が開かれていて、そこでたまたま富士山の世界遺産登録が決定したという出来事がありました。生徒たちは委員会のことも富士山のことも知らないのですが、これについて少し話をしますと、特に上級生は興味深げに聴いてくれました。話題としては良いタイミングでした。



大きくなったねエ !

「日本語ひろば」に出席していた小学2年生のT君が腸の病気で亡くなるという悲しい出来事もありました。おとなしい性格の生徒で、彼がお母さんのお腹の中にいる時にお父さんが外に女性を作って家を出て行ったため、カンボジアでは珍しい一人っ子でしたが、今、お母さんはお婆さんとの二人だけの生活になってしまいました。隣に住む人の話では、その後毎日泣き明かしている、ということです。カンボジアの農村の子どもたちや女性たちの多くは、単に“生きる”ということについても厳しい状況の中にいます。

世界遺産委員会と富士山について



■ 今回の一時帰国以来、カンボジアでの私たちのあり方について少し再確認してみたいという気持ちが起こっています。今私たちが意識していることは、私たちは何かのプロジェクトやプログラムを掲げてカンボジアにやって来たのではなく、ただカンボジアの人々、特に子どもたちとの関わりを求めてやって来た、ということです。現在やプロジェクト的なものになっている「小さな奨学金制度」や「衣類配布のためのイベント」などは、皆さまから「何かの役に立てて欲しい」とお預かりしたお金や品物を、「どのようにしたらも現在のカンボジアの子どもたちの必要性に合わせられるだろうか」と考えたことから始まりました。一般にNGOやNPOでは先ずプロジェクトが掲げられて、その実現のために支援を募るといったかたちを取りますが、私たちの場合は先ず皆さまの自由な気持ちから出たご支援があって、それをより良く役立たせるために私たちの活動がある、NGOのような大きな仕事はできないとしても……それがカンボジアでの私たちのあり方だと考えています。

そしていつも忘れずにいたいと思っていることは、“関わりが中心”ということです。カンボジアの子どもたち——私たちそして日本の皆さまとの関係は「支援される者と支援する者」である以上に、「互いを心に掛けている友人」の繋がりでありたい……それが私たちの願いです。

そうした意味からも、私たちの一番大切な役割は日本の皆さまにカンボジアの子どもたちの“ありのままの今”を直接お伝えすることだと思っていますので、一時帰国の折に多くの方々に関心を持って「報告会」などの集りを持って下さったことは、何よりも嬉しく有難いことでした。



久しぶりの奨学金生徒たち



子どもひろば 相変わらずの賑やかさ

■ ところで、今回の一時帰国の折、数人の方から「カンボジアでの活動の“終息”についてどのように考えているのか」と尋ねられました。これまでは「続けられなくなる理由が生じるまで」などとあやふやな返事をしていたのですが、今回はこのような率直な質問を下さるのは「カンボジアの子どもたちや私たちを深く気遣って下さっているからこそだ」と強く感じ、いつまでも無責任な態度を取ってはいられないと考え始めました。恐らく、“突然の終息”ではなく、“終息へのステップ”を考えることが必要なのだと思います。まだはっきりした展望はありませんが、この点でも皆さまからの忠告やご意見を大切にしていきたいと思っています。

とは言え、まだ当分の間“もちそう”です。すからご安心下さい。それに、カンボジア

の子どもたちの中にいますと、楽観的な気持ばかりが膨らんできて少し困ります。

■ 今回の通信は、カンボジアの子どもたちの近況をお伝えするといういつものテーマからずれた内容になりましたので、「番外」とさせて頂きました。